

秘密

谷崎潤一郎

青空文庫

その頃ころ私は或ある気き紛まれな考かんから、今迄いままで自分の身のまわりを裏つんで居た賑にぎやかな雰ふん囲い気を遠とざかつて、いろいろの關係で交際を續けて居た男や女の圈内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ、方々と適当な隠れ家を捜し求めた揚句、浅草の松葉町辺に真言宗しんごんしゅうの寺のあるのを見附けて、ようよう其処そこの庫裡くらりの一と間を借り受けることになつた。

新堀の溝みぞへついて、菊屋橋から門跡もんぜきの裏手を直すつ直ぐに行つたところ、十二階の下の方の、うるさく入り組んだObscureな町の中にその寺はあつた。ごみ溜ための箱を覆くつした如ごとく、あの辺一帶にひろがつて居る貧民窟ひんみんくつの片側に、黄橙だいたいいろ色の土塀どべいの壁が長く續いて、如何いかにも落ち着いた、重々しい寂しい感じを与える構えであつた。

私は最初から、渋谷だの大久保だのと云う郊外へ隠遁いんとんするよりも、却かえつて市内の何処どこかに人の心附かない、不思議なさびれた所があるであろうと思つていた。丁度瀬の早い溪たに川がのところどころに、澗よどんだ淵ふちが出来るように、下町の雑沓ざつとつする巷ちまたと巷あわいの間に挟はさまりながら、極めて特殊の場合か、特殊の人でもなければめつたに通行しないような閑静な一郭つかくが、なければなるまいと思つていた。

同時に又こんな事も考えて見た。——

己おれは随分旅行好きで、京都、仙台、北海道から九州までも歩いて来た。けれども未だいまこの東京の町の中に、人形町で生れて二十年来永住している東京の町の中に、一度も足を踏ふみ入れた事のないと云う通りが、屹度きつとあるに違いない。いや、思ったより沢山あるに違ちがいない。

そうして大都会の下町に、蜂はちの巣の如く交錯している大小無数の街路のうち、私が通った事のある所と、ない所では、孰方どっちが多いかちよいと判わからなくなつて来た。

何でも十一二歳の頃であつたらう。父と一緒に深川の八幡様はちまんさまへ行つた時、

「これから渡しを渡つて、冬木ふゆぎの米市こめいちで名代のそばを御馳走ごちそうしてやるかな。」

こう云つて、父は私を境内けいだいの社殿うしろの後の方へ連れて行つた事がある。其処には小網町や小舟町辺の掘割と全く趣の違つた、幅の狭い、岸の低い、水の一杯にふくれ上つている川が、細かく建て込んである両岸の家々の、軒と軒とを押し分けるように、どんよりと物憂ものうく流れて居た。小さな渡し船は、川幅よりも長そうな荷足りや伝馬てんまが、幾艘いくそうも縦なに列ならんでいる間を縫いながら、二た竿さお三竿さおばかりちよろちよると水底みなそこを衝ついて往復して居た。私はその時まで、たびたび八幡様へお参りをしたが、未だ嘗かつて境内の裏手がどんなになつているか考えて見たことはなかつた。いつも正面の鳥居の方から社殿を拝むだけで、恐ら

くパノラマの絵のように、表ばかりで裏のない、行き止まりの景色のように自然と考えていたであろう。現在眼めの前にこんな川や渡し場が見えて、その先に広い地面が果てしもなく続いている謎なぞのような光景を見ると、何となく京都や大阪よりもっと東京をかけた離れた、夢の中で屢々しばしば出逢うことのある世界の如く思われた。

それから私は、浅草の観音堂の真うしろにはどんな町があったか想像して見たが、仲店なかみせの通りから宏こうだい大な朱塗りのお堂の豊いらかを望んだ時の有様ばかりが明瞭めいりょうに描かれ、その外の点はとんと頭に浮かばなかつた。だんだん大人になって、世間が広くなるに随したがい、知人の家を訪ねたり、花見遊山ゆざんに出かけたり、東京市中は隈なく歩いたようであるが、いまだに子供の時分経験したような不思議な別世界へ、ハタリと行き逢うことがたびたびあつた。

そう云う別世界こそ、身を匿かくすには究くつきよう竟あつであろうと思つて、此処ここ彼処かしこといろいろに捜し求めて見れば見る程、今迄通つたことのない区域いたところが到る処ところに発見された。浅草橋いすみと和泉橋いずみは幾度も渡つて置きながら、その間にある左衛門橋を渡つたことがない。二長町にちようまちの市村座へ行くのには、いつも電車通りからそばやの角を右へ曲つたが、あの芝居の前を真まつ直ぐに柳盛座の方へ出る二三町ばかりの地面は、一度も踏んだ覚えはなかつた。昔の永えいた

代橋の右岸の袂たもとから、左の方の河岸かしはどんな工合くわいになつて居たか、どうも好く判らなかつた。その外八丁堀、越前堀、三味線堀しやみせんぼり、山谷堀さんやの界限かいわいには、まだまだ知らない所が沢山あるらしかつた。

松葉町のお寺の近傍は、そのうちでも一番奇妙な町であつた。六区と吉原を鼻先に控えてちよいと横丁を一つ曲つた所に、淋さびしい、廃すたれたような区域を作っているのが非常に私の氣に入つて了しまつた。今迄自分の無二の親友であつた「派手な贅ぜいたく、沢たくなそうして平凡な東京」と云う奴やつを置いてき堀ほりにして、静かにその騷そうじょう擾じょうを傍觀しながら、こつそり身を隠して居られるのが、愉快でならなかつた。

隠遁をした目的は、別段勉強をする為めではない。その頃私の神経は、刃やの擦すり切れたやりのように、鋭敏な角々がすっかり鈍つて、余程色彩の濃い、あくどい物に出逢わなければ、何の感興かんきやうも湧わかなかつた。微細な感受性の働はたらきを要求する一流の芸術だとか、一流の料理だとかを翫が味みするのが、不可能になつていた。下町くだまちの粹いきと云われる茶屋の板前に感心して見たり、仁左衛門にざゑもんや鴈治郎がんじろうの技巧を賞美したり、凡すべて在り来たりの都会の歡樂を受け入れるには、あまり心が荒すんでいた。惰力の為めに面白くもない懶惰らんだな生活を、毎日々々繰り返して居るのが、堪たえられなくなつて、全然きゆうとう旧套きゆうたうを擺は脱だつした、物好きものずきな、

アーティフィシャルな、Mode of lifeを見出して見たかったのである。

普通の刺戟に馴れて了った神経を顫い戦かすような、何か不思議な、奇怪な事はないであろうか。現実をかけ離れた野蛮な荒唐な夢幻的な空気の中に、棲息することは出来ないであろうか。こう思つて私の魂は遠くバビロンやアッシリヤの古代の伝説の世界にさ迷つたり、コナンドイルや涙香の探偵小説を想像したり、光線の熾烈な熱帯地方の焦土と緑野を恋い慕つたり、腕白な少年時代のエクセントリックな悪戯に憧れたりした。

賑かな世間から不意に韜晦して、行動を唯徒らに秘密にして見るだけでも、すでに一種のミステリアスな、ロマンチックな色彩を自分の生活に賦与することが出来ると思つた。

私は秘密と云う物の面白さを、子供の時分からしみみと味わつて居た。かくれんぼ、宝さがし、お茶坊主のような遊戯——殊に、それが闇の晩、うす暗い物置小屋や、観音開きの前などで行われる時の面白味は、主としてその間に「秘密」と云う不思議な気分が潜んで居るせいであつたに違いない。

私はもう一度幼年時代の隠れん坊のような気持を経験して見たさに、わざと人の気の附かない下町の曖昧なところに身を隠したのであつた。そのお寺の宗旨が「秘密」とか、

「禁厭」とか、「呪詛」とか云うものに縁の深い真言宗であることも、私の好奇心を誘

うて、妄想を育ませるには恰好であった。部屋は新らしく建て増した庫裡の一部で、南を向いた八畳敷きの、日に焼けて少し茶色がかっている畳が、却って見た眼には安らかな暖かい感じを与えた。昼過ぎになると和やかな秋の日が、幻燈の如くあかあかと縁側の障子に燃えて、室内は大きな雪洞のように明るかった。

それから私は、今迄親しんで居た哲学や芸術に関する書類を一切戸棚へ片付けて了つて、魔術だの、催眠術だの、探偵小説だの、化学だの、解剖学だのの奇怪な説話と挿絵に富んでいる書物を、さながら土用干の如く部屋中へ置き散らして、寝ころびながら、手あたり次第に繰りひろげては耽読した。その中には、コナンドイルの *The Sign of Four* や、

ドキンシイの *Murder, Considered as one of the fine arts* や、アラビアンナイトのようなお伽
嘶ぼなし から、仏蘭西の不思議な *Sexuology* の本なども交つていた。

此処の住職が秘していた地獄極楽の図を始め、須弥山図だの涅槃像だの、いろいろの古い仏画を強いて懇望して、丁度学校の教員室に掛っている地図のように、所嫌わず部屋の四壁へぶら下げて見た。床の間の香炉からは、始終紫色の香の煙が真つ直ぐに静かに立ち昇つて、明るい暖かい室内を焚きしめて居た。私は時々菊屋橋際の舗へ行って白檀や沈香を買つて来てはそれを燻べた。

天氣の好い日、きらきらとした真昼の光線が一杯に障子へあたる時の室内は、眼の醒める
 ような壯觀を呈した。絢爛な色彩の古画の諸仏、羅漢、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、
 象、獅子、麒麟などが四壁の紙幅の内から、ゆたかな光の中に泳ぎ出す。畳の上に投げ出
 された無数の書物からは、慘殺、麻酔、魔藥、妖女、宗教——種々雑多の傀儡が、
 香の煙に溶け込んで、朦朧と立ち罩める中に、二畳ばかりの緋毛氈を敷き、どんより
 とした蛮人のような瞳を据えて、寝ころんだ儘、私は毎日々々幻覺を胸に描いた。
 夜の九時頃、寺の者が大概寢静まつて了うとウキスキーの角壇を叩つて酔いを買つた後、
 勝手に縁側の雨戸を引き外し、墓地の生け垣を乗り越えて散歩に出かけた。成る可く人目
 にかからぬように毎晩服装を取り換えて公園の雑沓の中を潜つて歩いたり、古道具屋や
 古本屋の店先を漁り廻つたりした。頬冠りに唐棧の半纏を引つ掛け、綺麗に研いた
 素足へ爪紅をさして雪駄を穿くこともあつた。金縁の色眼鏡に二重廻しの襟を立てて
 出ることもあつた。着け髭、ほくろ、痣と、いろいろに面体を換えるのを面白がつたが、
 或る晩、三味線堀の古着屋で、藍地に大小あられの小紋を散らした女物の袷が眼に附いて
 から、急にそれが着て見たくてたまらなくなつた。

一体私は衣服反物に対して、単に色合が好いとか柄が粹だとかいう以外に、もつと深く鋭

い愛着心を持つて居た。女物に限らず、凡べて美しい絹物を見たり、触れたりする時は、何となく顫い附きたくなくて、丁度恋人の肌の色を眺めるような快感の高潮に達することゝ屢々であつた。殊に私の大好きなお召や縮緬を、世間憚らず、恣に着飾ることの出来る女の境遇を、嫉ましく思うことさえあつた。

あの古着屋の店にだらりと生々しく下つて居る小紋縮緬の袷——あのしつとりした、重い冷たい布が粘つくように肉体を包む時の心好さを思うと、私は思わず戦慄した。あの着物を着て、女の姿で往来を歩いて見たい。……こう思つて、私は一も二もなくそれを買う氣になり、ついでに友禪の長襦袢や、黒縮緬の羽織返も取りそろえた。

大柄の女が着たものと見えて、小男の私には寸法も打つてつけであつた。夜が更けてがらんとした寺中がひっそりした時分、私はひそかに鏡台に向つて化粧を始めた。黄色い生地きじの鼻柱へ先ずベツトリと練りお白粉しろいをなすり着けた瞬間の容貌ようぼうは、少しグロテスクに見えたが、濃い白い粘液を平手で顔中へ万遍なく押し拵ひろげると、思つたよりものが好く、甘い匂においのひやひやとした露が、毛孔けあなへ沁しみ入る皮膚のよろこびは、格別であつた。紅やとのこを塗るに随つて、石膏せつこうの如く唯徒らに真つ白であつた私の顔が、澁刺はつらつとした生色ある女の相に變つて行く面白さ。文士や画家の芸術よりも、俳優や芸者や一般の女が、

日常自分の体の肉を材料として試みている化粧の技巧の方が、遥かに興味の多いことを知った。

長襦袢、半襟、腰巻、それからチュツチュツと鳴る紅絹裏の袂、——私の肉体は、凡べて普通の女の皮膚が味わうと同等の触感を与えられ、襟足から手頸まで白く塗って、銀杏返しうがえの鬢かつらの上にお高祖頭巾こそずきんを冠かぶり、思い切つて往来の夜道へ紛れ込んで見た。

雨曇りのしたうす暗い晩であった。千束町、清住町、龍泉寺町——あの辺一帯の溝の多い、淋しい街を暫くさまよつて見たが、交番の巡查も、通行人も、一向気が附かないようであった。甘皮あまかわを一枚張つたようにばさばさ乾いている顔の上を、夜風が冷やかに撫なでて行く。口辺くちべを蔽おほうて居る頭巾の布きれが、息の為に熱く湿うるつて、歩きたびに長い縮緬ちぢみの腰巻の裾すそは、じやれるように脚へ纏もつれる。みぞおちから肋骨あばらの辺を堅く緊しめ附けている丸帯と、骨盤こっぺんの上を括くくつて居る扱し帯きの加減で、私の体の血管には、自然と女のような血が流れ始め、男らしい気分や姿勢はだんだんとなくなつて行くようであった。

友禪ていぜんの袖そでの蔭かげから、お白粉を塗つた手をつき出して見ると、強い頑がんじょう丈な線が闇の中に消えて、白くふつくらと柔かに浮き出ている。私は自分で自分の手の美しさに惚ほれ惚ほれとした。このような美しい手を、実際に持つている女と云う者が、羨うらやましく感じられた。芝

居の弁天小僧のように、こう云う姿をして、さまぎまの罪を犯したならば、どんなに面白いであろう。……探偵小説や、犯罪小説の読者を始終喜ばせる「秘密」「疑惑」の気分ほうかつに髻ほうかつとした心持で、私は次第に人通りの多い、公園の六区の方へ歩みを運んだ。そうして、殺人とか、強盗とか、何か非常な残忍な悪事を働いた人間のように、自分を思い込むことが出来た。

十二階の前から、池の汀みぎわについて、オペラ館の四つ角へ出ると、イルミネーションとアーケ燈の光が厚化粧をした私の顔にきらきらと照って、着物の色合いや縞目しまめがはつきりと読める。常盤座ときわざの前へ来た時、突き当たりの写真屋の玄関の大鏡へ、そろそろ雑沓する群集の中に交って、立派に女と化け終おほせた私の姿が映って居た。

こっそり塗り附けたお白粉の下に、「男」と云う秘密こごとが悉く隠されて、眼つきも口つきも女のように動き、女のように笑おうとする。甘いへんのうの匂いと、囁ささやくような衣摺きぬずれの音を立てて、私の前後を擦れ違ちがう幾人の女の群も、皆私を同類と認めて訝あやしまない。そうしてその女達の中には、私の優雅な顔の作りと、古風な衣裳いしやうの好みとを、羨ましそうに見ている者もある。

いつも見馴れて居る公園の夜の騒擾そうじょうも、「秘密」を持って居る私の眼には、凡べてが

新しかった。何処へ行つても、何を見ても、始めて接する物のように、珍しく奇妙であった。人間の瞳を欺き、電燈の光を欺いて、濃艶な脂粉とちりめんの衣装の下に自分を潜ませながら、「秘密」の帷を一枚隔てて眺めるために、恐らく平凡な現実が、夢のような不思議な色彩を施されるのであろう。

それから私は毎晩のようにこの仮装をつづけて、時とすると、宮戸座の立ち見や活動写真の見物の間へ、平気で割つて入るようになった。寺へ帰るのは十二時近くであったが、座敷に上ると早速空気ランプをつけて、疲れた体の衣裳も解かず、毛氈の上へぐったり嫌らしく寝崩れた儘、残り惜しそうに絢爛な着物の色を眺めたり、袖口をちやちやらと振つて見たりした。剥げかかったお白粉が肌理の粗いたるんだ頬の皮へ滲み着いて居るのを、鏡に映して凝視して居ると、廃頹した快感が古い葡萄酒の酔いのように魂をそそった。地獄極楽の図を背景にして、けばけばしい長襦袢のまま、遊女の如くなよなよと蒲団の上へ腹這つて、例の奇怪な書物のページを夜更くる迄翻すこともあつた。次第に扮装も巧くなり、大胆にもなつて、物好きな聯想を醸させるために、ヒ首だの麻酔薬だのを、帯の間へ挿んでは外出した。犯罪を行わずに、犯罪に付随して居る美しいロマンチックの匂いだけを、十分に嗅いで見たかったのである。

そうして、一週間ばかり過ぎた或る晩の事、私は図らずも不思議な因縁から、もツと奇怪なもツと物好きな、そうしてもツと神秘的な事件の端緒に出会した。

その晩私は、いつもよりも多量にウキスキーを呷って、三友館の二階の貴賓席に上り込んで居た。何でももう十時近くであつたろう、恐ろしく混んで居る場内は、霧のような濁つた空気に充たされて、黒く、もくもくとかたまつて蠢動している群衆の生温かい人いきれが、顔のお白粉を腐らせるように漂つて居た。暗中にシヤキシヤキ軋みながら目まぐるしく展開して行く映画の光線の、グリグリと瞳を刺す度毎に、私の酔つた頭は破れるように痛んだ。時々映画が消えてぱツと電燈がつくと、溪底から沸き上る雲のように、階下の群衆の頭の上を浮動して居る煙草の烟の間を透かして、私は真深いお高祖頭巾の蔭から、場内に溢れて居る人々の顔を見廻した。そうして私の旧式な頭巾の姿を珍しうに窺つて居る男や、粋な着附けの色合を物欲しうに盗み視ている女の多いのを、心ひそかに得意として居た。見物の女のうちに、いでたちの異様な点から、様子の婀娜っぽい点から、乃至器量の点からも、私ほど人の眼に着いた者はないらしかつた。

始めは誰も居なかつた筈の貴賓席の私の側の椅子が、いつの間に塞がったのか能くは知らないが、二三度目に再び電燈がともされた時、私の左隣りに二人の男女が腰をかけて居る

のに気が附いた。

女は二十二三と見えるが、その実六七にもなるであろう。髪を三つ輪に結って、総身をお召の空色のマントに包み、くつきりと水のしたたるような鮮やかな美貌ばかりを、これ見よがしに露わにして居る。芸者とも令嬢とも判断のつき兼ねる所はあるが、連れの紳士の態度から推して、堅儀の細君ではないらしい。

「…………… Arrested at last. ……………」

と、女は小声で、フィルムの上に現れた説明書を読み上げて、土耳其巻の M. C. C. の薫りの高い烟を私の顔に吹き附けながら、指に箆めて居る宝石よりも鋭く輝く大きい瞳を、闇の中できらりと私の方へ注いだ。

あでやかな姿に似合わぬ太棹の師匠のような皺唄れた声、——その声は紛れもない、私が二三年前に上海へ旅行する航海の途中、ふとした事から汽船の中で暫く関係を結んで居た T 女であった。

女はその頃から、商売人とも素人とも区別のつかない素振りや服装を持って居たように覚えて居る。船中に同伴して居た男と、今夜の男とはまるで風采も容貌も変っているが、多分はこの二人の男の間を連結する無数の男が女の過去の生涯を鎖のように貫いて居

るのであろう。兎も角その婦人が、始終一人の男から他の男へと、胡蝶のように飛んで歩く種類の女であることは確かであった。二年前に船で馴染みになった時、二人はいろいろの事情から本当の氏名も名乗り合わず、境遇も住所も知らせずにいるうちに上海へ着いた。そうして私は自分に恋い憧れている女を好い加減に欺き、こっそり跡をくらまして了った。以来太平洋上の夢の中なる女とばかり思つて居たその人の姿を、こんな処で見ようとは全く意外である。あの時分やや小太りに肥えて居た女は、神々しい迄に痩せて、すつきりとして、睫毛の長い潤味を持つた円い眼が、拭うが如くに冴え返り、男を男とも思わぬような凜々しい權威さえ具えている。触るるものに紅の血が濁染むかと疑われた生々しい唇と、耳朶の隠れそうな長い生え際ばかりは昔に変らないが、鼻は以前よりも少し峻しい位に高く見えた。

女は果たして私に気が附いて居るのであろうか。どうも判然と確かめることが出来なかつた。明りがつくと連れの男にひそひそ戯れて居る様子は、傍に居る私を普通の女と蔑んで、別段心にかけて居ないようでもあった。実際その女の隣りに居ると、私は今迄得意であった自分の扮装を卑しまない訳には行かなかつた。表情の自由な、如何にも生き生きとした妖女の魅力に気圧されて、技巧を尽した化粧も着附けも、醜く浅ましい化物のような気

がした。女らしいと云う点からも、美しい器量からも、私は到底彼女の競争者ではなく、月の前の星のように果敢なく萎れて了うのであった。

朦々と立ち罩めた場内の汚れた空気の中に、曇りのない鮮明な輪郭をくつきりと浮かばせて、マントの蔭からしなやかな手をちらちらと、魚のように泳がせているあでやかさ。

男と対談する間にも時々夢のような瞳を上げて、天井を仰いだり、眉根を寄せて群衆を見下ろしたり、真つ白な歯並みを見せて微笑んだり、その度毎に全く別趣の表情が、溢れんばかりに湛えられる。如何なる意味をも鮮やかに表し得る黒い大きい瞳は、場内の二つの宝石のように、遠い階下の隅からも認められる。顔面の凡べての道具が単に物を見たり、嗅いだり、聞いたたり、語ったりする機関としては、あまりに余情に富み過ぎて、人間の顔と云うよりも、男の心を誘惑する甘味ある餌食であった。

もう場内の視線は、一つも私の方に注がれて居なかつた。愚かにも、私は自分の人気を奪い去つたその女の美貌に対して、嫉妬と憤怒を感じ始めた。嘗ては自分が弄んで恣に棄ててしまつた女の容貌の魅力に、忽ち光を消されて踏み附けられて行く口惜しさ。事に依ると女は私を認めて居ながら、わざと皮肉な復讐をして居るのではないであらうか。

私は美貌を羨む嫉妬の情が、胸の中で次第々々に恋慕の情に変わつて行くのを覚えた。女と

しての競争に敗れた私は、今一度男として彼女を征服して勝ち誇ってやりたい。こう思うと、抑え難い欲望に駆られてしなやかな女の体を、いきなりむずと驚掴みにして、揺す振って見たくもなつた。

君は予の誰なるかを知り給うや。今夜久しぶりに君を見て、予は再び君を恋し始めたり。今一度、予と握手し給うお心はなきか。明晩もこの席に来て、予を待ち給うお心はなきか。予は予の住所を何人にも告げ知らず事を好まねば、唯願わくは明日の今頃、この席に来て予を待ち給え。

闇に紛れて私は帯の間から半紙と鉛筆を取出し、こんな走り書きをしたものをひそかに女の袂へ投げ込んだ、そうして、又じつと先方の様子を窺っていた。

十一時頃、活動写真の終るまでは女は静かに見物していた。観客が総立ちになってどやどやと場外へ崩れ出す混雑の際、女はもう一度、私の耳元で、

「…………… Arrested at last. ……………」

と囁きながら、前よりも自信のある大胆な凝視を、私の顔に暫く注いで、やがて男と一緒にごみの中へ隠れてしまった。

「…………… Arrested at last. ……………」

女はいつの間にか自分を見附け出して居たのだ。こう思つて私は竦然とした。

それにしても明日の晩、素直に来てくれるであろうか。大分昔よりは年功を経ているらしい相手の力量を測らずに、あのような真似をして、却つて弱点を握られはしまいか。いろいろの不安と疑懼に挟まれながら私は寺へ歸つた。

いつものように上着を脱いで、長襦袢一枚になろうとする時、ぱらりと頭巾の裏から四角にたたんだ小さい洋紙の切れが落ちた。

「Mr. S. K.」

と書き続けたインキの痕をすかして見ると、玉甲斐絹のように光っている。正しく彼女の手であつた。見物中、一二度小用に立つたようであつたが、早くもその間に、返事をしたためて、人知れず私の襟元へさし込んだものと見える。

思いがけなき所にて思いがけなき君の姿を見申候。たとい装いを変え給うとも、三年このかた夢寐にも忘れぬ御面影を、いかで見逃し候べき。妾は始めより頭巾の女の君なる事を承知仕候。それにつけても相変わらず物好きなる君にておわせしことの可笑しさよ。妾に会わんと仰せらるるも多分はこの物好きのおん興じにやと心許なく存じ候えども、あまりの嬉しさに兎角の分別も出でず、唯仰せに従い明夜は必ず御待ち申す可

く候。ただし、妾に少々都合もあり、考えも有これあり之候。え、九時より九時半までの間にかみなりもん雷門までお出で下されまじくや。其処そこにて当方より差し向けたるお迎いの車夫が、必ず君を見つけ出して拙宅へご案内致す可く候。君の御住所を秘し給うと同様に、妾も今の在り家を御知らせ致さぬ所存にて、車上の君に眼隠しをしてお連れ申すよう取りはからわせ候間、右御許し下され度たく、若しこの一事を御承引下され候わずば、妾は永遠に君を見ることかなわず、これに過ぎたる悲しみは無これなく之候。

私はこの手紙を読んで行くうちに、自分がいつの間にか探偵小説中の人物となり終せて居るのを感じた。不思議な好奇心と恐怖とが、頭の中で渦うずを巻いた。女が自分の性癖を呑み込んで居て、わざとこんな真似をするのかとも思われた。

明くる日の晩は素晴らしい大雨であった。私はすっかり服装を改めて、対つひの大島の上にゴム引きの外がいしとう套を纏まとい、ざぶん、ざぶんと、甲斐絹張りの洋傘に、滝たきの如くたたきつける雨の中を戸外おもてへ出た。新堀の溝みぞが往来一円に溢れているので、私は足袋たびふところを懐へ入れたが、びしょびしょに濡ぬれた素足が家並みのランプに照らされて、ぴかぴか光って居た。夥おびただしい雨量が、天からざあざあといちよくしや瀉ちやくしやする喧囂けんこうの中に、何もかも打ち消されて、ふだん賑にぎやかな広小路の通りも大概雨戸を締め切り、二三人の臀端しりはしよ折りの男が、敗走した兵士の

ように駈け出して行く。電車が時々レールの上に溜まった水をほとばしらせて通る外は、ところどころの電柱や広告のあたりが、朦朧たる雨の空中をぼんやり照らしているばかりであった。

外套から、手首から、肘の辺まで水だらけになつて、漸く雷門へ来た私は、雨中にしょんぼり立ち止りながらアーク燈の光を透かして、四辺を見廻したが、一つも人影は見えない。何処かの暗い隅に隠れて、何者かが私の様子を窺っているのかも知れない。こう思つて暫くイんで居ると、やがて吾妻橋の方の暗闇から、赤い提灯の火が一つ動き出して、がらがらと街鉄の鋪き石の上を駛走して来た旧式な相乗りの俵がぴたりと私の前で止まつた。

「旦那、お乗なすつて下さい。」

深い饅頭笠に雨合羽を着た車夫の声が、車軸を流す雨の響きの中に消えたかと思つて、男はいきなり私の後へ廻つて、羽二重の布を素早く私の両眼の上へ二た廻り程巻きつけて、蟬谷の皮がよじれる程強く締め上げた。

「さあ、お召しなさい。」

こう云つて男のざらざらした手が、私を掴んで、惶しく俵の上へ乗せた。

しめつばい匂いのする幌ほろの上へ、ぱらぱらと雨の注ぐ音がする。疑いもなく私の隣には女が一人乗って居る。お白粉しろいの薫りと暖かい体温が、幌の名へ蒸すように罩こもっていた。轆かじを上げた俵は、方向を晦くらます為めに一つ所をくるくると二三度廻って走り出したが、右

へ曲り、左へ折れ、どうかするとLabyrinthの中をうろついて居るようであった。時々電車通りへ出たり、小さな橋を渡ったりした。

長い間、そうして俵に揺られて居た。隣りに並んでいる女は勿論もちろん丁女であろうが、黙って身じろぎもせず腰かけている。多分私の眼隠めかくしが嚴格に守られるか否いなかを監督する為めに同乗して居るものらしい。しかし、私は他人の監督がなくても、決してこの眼かくしを取り外はずす気はなかった。海の上で知り合いになった夢のような女、大雨の晩の幌の中、夜の都会の秘密、盲目、沈黙——凡べての物が一つになって、渾然こんぜんたるミステリーの霧もやの裡うちに私を投げ込んで了って居る。

やがて女は固く結んだ私の唇を分けて、口の中へ巻煙草を挿さし込んだ。そうしてマッチを擦って火をつけてくれた。

一時間程経たって、漸ようやく俵は停とまった。再びざらざらした男の手が私を導きながら狭そうな路次を二三間行くと、裏木戸のようなものをギーと開けて家の中へ連れて行った。

眼を塞がれながら一人座敷に取り残されて、暫く座すわっていると、間もなく襖ふすまの開く音がした。女は無言の儘まま、人魚のように体を崩たひして擦り寄りつつ、私の膝ひざの上へ仰向きに上半身を靠もたせかけて、そうして両腕を私の項うなじに廻して羽二重の結び目をはらりと解いた。

部屋は八畳位もあろう。普請ふしんと云い、装飾と云い、なかなか立派で、木柄きがらなども選んではあるが、丁度この女の身分が分らぬと同様に、待合とも、妾しやうたく宅とも、上流の堅気な住まいとも見極めがつかない。一方の縁側の外にはこんもりとした植え込みがあつて、その向うは板いたべい塀へいに囲われている。唯これだけの眼界では、この家が東京のどの辺にあたるのか、大凡おおおよその見当すら判らなかつた。

「よく来て下さいましたね。」

こう云いながら、女は座敷の中央の四角な紫檀したんの机へ身を靠せかけて、白い両腕を二匹の生き物のように、だらりと卓上に匍はわせた。襟のかかった渋い縞しまお召めしに腹合わせ帯をしめて、銀杏いちようがえ返しに結ゆつて居る風情ふぜいの、昨夜と恐ろしく趣が変つて居るのに、私は先まず驚かされた。

「あなたは、今夜あたしがこんな風をして居るのは可笑おかしいと思つていらつしやるんですよ。それでも人に身分を知らせないようにするには、こうやって毎日身なりを換えるよ

り外に仕方がありませんからね。」

卓上に伏せてある洋盃コップを起して、葡萄酒ぶどうしゆを注つぎながら、こんな事を云う女の素振りには、思つたよりもしとやかに打ち萎しおれて居た。

「でも好よく覚えて居て下さいましたね。上海でお別れしてから、いろいろの男と苦勞もして見ましたが、妙にあなたの事を忘れることが出来ませんでした。もう今度こそは私を棄てないで下さいまし。身分も境遇も判らない、夢のような女だと思つて、いつまでもお付き合いなすつて下さい。」

女の語る一言一句が、遠い国の歌のしらべのように、哀あ韻いんを含んで私の胸に響いた。昨夜のような派手な勝ち気な伶俐りはつな女が、どうしてこう云う憂ゆう鬱うつな、殊勝な姿を見せることが出来るのであろう。さながら万事を打ち捨てて、私の前に魂を投げ出ししているようであつた。

「夢の中の女」「秘密の女」朦朧もうろうとした、現実とも幻覚とも区別の附かない Love adventure の面白さに、私はそれから毎晩のように女の許もとに通い、夜半よなかの二時頃迄遊んでは、また眼かくしをして、雷門まで送り返された。一と月も二た月も、お互に所を知らず、名を知らずに会見していた。女の境遇や住宅を捜さぐり出そうと云う気は少しもなかつたが、だん

だん時日が立つに従い、私は妙な好奇心から、自分を乗せた俵が果して東京の何方どっちの方面に二人を運んで行くのか、自分の今眼を塞がれて通つて居る処は、浅草から何どの辺あたに方あつて居るのか、唯それだけを是非とも知つて見たくなつた。三十分も一時間も、時とするで一時間半もがらりと市街を走つてから、轆を下ろす女の家は、案外雷門の近くにあるのかも知れない。私は毎夜俵に揺す振られながら、此処ここか彼処あそこかと心の中に憶測おくそくを廻めぐらす事を禁じ得なかつた。

或る晩、私はとうとうたまらなくなつて、

「一寸ちよつとでも好いから、この眼かくしを取つてくれ。」

と俵の上で女にせがんだ。

「いけません、いけません。」

と、女は慌あわてて、私の両手をしツかり抑えて、その上へ顔を押しあてた。

「何卒どつぞそんな我が儘を云わないで下さい。此処の往来はあたしの秘密です。この秘密を知られればあたしはあなたに捨てられるかも知れません。」

「どうして私に捨てられるのだ。」

「そうなれば、あたしはもう『夢の中の女』ではありません。あなたは私を恋して居るよ

りも、夢の中の女を恋して居るのですもの。」

いろいろに言葉を尽して頼んだが、私は何と云つても聴き入れなかった。

「仕方がない、そんなら見せて上げましょう。……その代り一寸ですよ。」

女は嘆息するように云つて、力なく眼かくしの布を取りながら、

「此処が何処どこだか判りますか。」

と、心こころ許もとない顔つきをした。

美しく晴れ渡つた空の地色は、妙に黒ずんで星が一面にきらきらと輝き、白い霞かすみのような天の川が果てから果てへ流れている。狭い道路の両側には商店が軒を並べて、燈火の光が賑やかに町を照らしていた。

不思議な事には、可なり繁華な通りであるらしいのに、私はそれが何処の街であるか、さっぱり見当が附かなかつた。俣はどンドンその通りを走つて、やがて一二町先の突き当りの正面に、精美堂と大きく書いた印形屋いんぎょうやの看板が見え出した。

私が看板の横に書いてある細い文字の町名番地を、俣の上で遠くから覗のぞき込むようにすると、女は忽たちまち気が附いたか、

「あれッ」

と云つて、再び私の眼を塞いで了つた。

賑やかな商店の多い小路で突きあたりに印形屋の看板の見える街、——どう考えて見ても、私は今迄通つたことのない往来の一つに違ひないと思つた。子供時代に経験したような謎の世界の感じに、再び私は誘われた。

「あなた、あの看板の字が読めましたか。」

「いや読めなかつた。一体此処は何処なのだか私にはまるで判らない。私はお前の生活に就いては三年前の太平洋の波の上の事ばかりしか知らないのだ。私はお前に誘惑されて、何だか遠い海の向うの、幻の国へ伴れて来られたように思われる。」

私がこう答えると、女はしみじみとした悲しい声で、こんな事を云つた。

「後生だからいつまでもそう云う気持で居て下さい。幻の国に住む、夢の中の女だと思つて居て下さい。もう二度と再び、今夜のような我が儘を云わないで下さい。」

女の眼からは、涙が流れて居るらしかつた。

その後暫く、私は、あの晩女に見せられた不思議な街の光景を忘れることが出来なかつた。燈火のかんかんともつている賑やかな狭い小路の突き当りに見えた印形屋の看板が、頭に

はつきりと印象されて居た。何とかして、あの町の在りかを捜し出そうと苦心した揚句、私は漸く一策を案じ出した。

長い年月の間、毎夜のように相乗りをして引き擦り廻されて居るうちに、雷門で俵がくるくると一つ所を廻る度数や、右に折れ左に曲る回数まで、一定して来て、私はいつともなくその塩梅を覚え込んでしまった。或る朝、私は雷門の角へ立って眼をつぶりながら二三度ぐるぐると体を廻した後、この位だと思ふ時分に、俵と同じ位の速度で一方へ駆け出して見た。唯好い加減に時間を見はからつて彼方此方の横町を折れ曲るより外の方法はなかつたが、丁度この辺と思ふ所に、予想の如く、橋もあれば、電車通りもあつて、確かにこの道に相違ないと思われた。

道は最初雷門から公園の外郭を廻つて千束町に出て、龍泉寺町の細い通りを上野の方へ進んで行つたが、車坂下で更に左へ折れ、お徒町の往來を七八町も行くとやがて又左へ曲り始める。私は其処でハタとこの間の小路にぶつかった。

成る程正面に印形屋の看板が見える。

それを望みながら、秘密の潜んでいる巖窟の奥を究めでもするように、つかつかと進んで行つたが、つきあたりの通りへ出ると、思いがけなくも、其処は毎晩夜店の出る下谷竹

町の往来の続きであった。いつぞや小紋の縮緬ちりめんを買った古着屋の店もつい二三間先に見えて居る。不思議な小路は、三味線堀と仲お徒町の通りを横に繋いで居る街路であったが、どうも私は今迄其処を通つた覚えがなかつた。散々私を悩ました精美堂の看板の前に立つて、私は暫くたらずで居た。燦爛さんらんとした星の空を戴いたいて夢のような神秘的な空気おほに蔽おほわれながら、赤い燈火を湛たえて居る夜の趣とは全く異り、秋の日にかんかん照り附けられて乾涸ひからびて居る貧相な家並を見ると、何だか一時にがっかりして興が覚めて了つた。

抑え難い好奇心に駆られ、犬が路上の匂においを嗅かぎつつ自分の棲すみ家へ帰るように、私は又其処から見当をつけて走り出した。

道は再び浅草区へ這入はいつて、小島町から右へ右へと進み、菅橋すがばしの近所で電車通りを越え、代地河岸を柳橋の方へ曲つて、遂ついに両国の広小路へ出た。女が如何いかに方角を悟らせまいとして、大迂廻だいうかいをやつていたかが察せられる。薬研堀やげんぼり、久松町、浜町と来て蠣浜橋かきはまばしを渡つた処で、急にその先が判らなくなつた。

何んでも女の家は、この辺の路次にあるらしかった。一時間ばかりかかつて、私はその近所の狭い横町を出つ入りつした。

丁度道了どつりよう権現ごんげんの向い側の、ぎつしり並んだ家と家との庇間ひあわいを分けて、殆ど眼ほとんにつか

ないような、細い、ささやかな小路のあるのを見つけ出した時、私は直覺的に女の家がその奥に潜んで居ることを知った。中へ這入って行くと右側の二三軒目の、見事な洗い出しの板塀に囲まれた二階の欄干から、松の葉越しに女は死人のような顔をして、じつと此方を見おろして居た。

思わず嘲るような瞳を挙げて、二階を仰ぎ視ると、寧ろ空惚けて別人を装うものの如く、女はにこりともせず私の姿を眺めて居たが、別人を装うても訝しまれぬくらい、その容貌は夜の感じと異つて居た。たツた一度、男の乞いを許して、眼かくしの布を弛めたばかりに、秘密を発かれた悔恨、失意の情が見る見る色に表われて、やがて静かに障子の蔭へ隠れて了つた。

女は芳野と云うその界限での物持の後家であつた。あの印形屋の看板と同じように、凡べての謎は解かれて了つた。私はそれきりその女を捨てた。

二三日過ぎてから、急に私は寺を引き払つて田端の方へ移転した。私の心はだんだん「秘密」などと云う手ぬるい淡い快感に満足しなくなつて、もツと色彩の濃い、血だらけな歡樂を求めるように傾いて行つた。

青空文庫情報

底本：「刺青・秘密」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年8月5日発行

2011（平成23）年11月20日84刷改版

2014（平成26）年6月5日87刷

初出：「中央公論」

1911（明治44）年11月

※「群集」と「群衆」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：「ハルナ

校正：まつも（こ）

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秘密

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>